

こあま 小海女のふきちゃん

北村けんじ・作 石倉欣二・絵



^{きたむつ}
北村けんじ

^こ^あ^ま
小海女のふきちゃん

小峰書店 1982(昭57)年

135p. 22cm (こみね創作童話・30)

^こ^あ^ま
小海女のふきちゃん

1982年2月28日 第1刷発行

著 者 ^{きたむつ}北村けんじ

発行者 小峰広恵

発行所 株式会社 小峰書店

〒160 東京都新宿区舟町6

☎東京 357-3521(代表)

振替 東京6-195544

本文印刷 株式会社 厚德社

表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

製 本 小高製本工業株式会社

©1982 北村けんじ 石倉欣二

ISBN4-338-01930-1

小海女のふきちゃん

北村けんじ・作 石倉欣二・絵



はじめに

あなたは、海がすきですか。

あなたは、およげますか。

ふきちゃんは、

海がきらいで、およげません。



それでも、

あつぷ、あつぷ、

海のしおに、むせびながら、

死んだおかあさんが、

海の中に、わすれていったものを、

見つけたのです。

ふきちゃんこあまは、小海女こあまになったのです。



は
じ
め
に
2

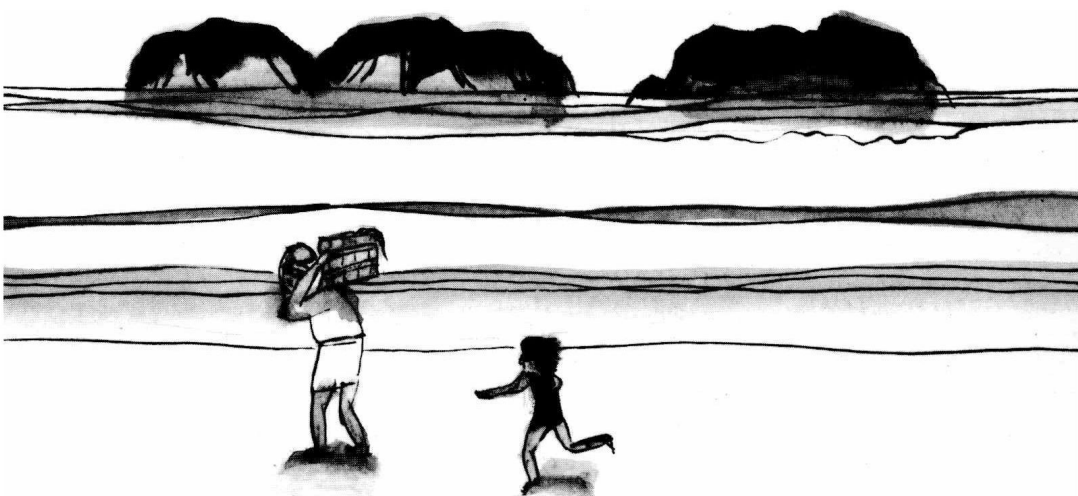
は
じ
め
て
の
海
8

な
む
や
竜宮^{りゅうぐう}さん
22

わ
た
し
死
ん
だ
る
34

あ
ら
し
の
夜
に
50

海
の
中
の
か
か
し
68



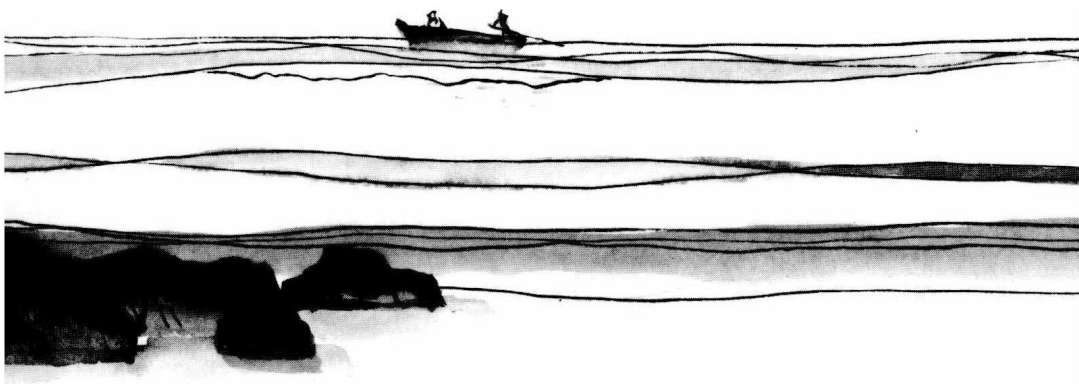
耳がやぶれた 80

まん月の人形じようるり 92

けいこ海女^{あま} 104

行きか帰りか 124

あとがき 134



* 文をかいた人



北村けんじ 一九二九年三重県に生まれる。
中部児童文学会、日本児童文学会、日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会に属す。作品に『まぼろしの巨鯨シマ』『トモカヅキのいる海』『坂道のある学校』『ドンが見た風の鳥』『さよのいそ笛』等がある。
現住所 三重県桑名郡多度町戸津

* 絵をかいた人



石倉欣二 一九三七年愛媛県に生まれる。東京芸術大学工芸科卒業。作品に『火になった人魚』『れんざぶろうきつね』『たなばたむかし』『ももたろう』『なまはげ正月』『かさじぞう』『おもんぼっずき』『日本への遠い道——モラエス伝』等がある。
東京在住

小海女のふきちゃん



はじめての海

きのうはじめて、そう生まれてはじめて、ふきちゃんは、島のはつばあさんの家へ来た。

三時間汽車にのり、それから小型^{こがた}れんらく船にのりつぎ、ゆられゆられて、たどりついた、ひとりたびだった。

船からさんばしにおりと、魚やいかのなまぐさいにおいがむねにつかえて、のどのおくがぐぐつとなった。

「ふき、ふきちゃんやろ！」

出むかえてくれたはつばあさんが、気づいてくれたが、きついひざしの中で

はつばあさんの顔がぼやけてはつきり見えなかった。

「なんや、おばあさんを忘れたんか？」

「ううん。」

むねがわるくて、それだけ言うのがやっとだった。

けれど、きょう、石がきをつたってはまべにでると、海はきのうとはまるでちがって、こんぶのにおいがした。

沖はミルクをとかしたみたいに白い。白いおびが岸に近づくにしたがって、青くなる。その上をなす色のさざ波が走っていく。

さざ波を見ていると、海はこちらにむかってゆったりともちあがってくる。

ふきちゃんは、おとうさんと二人ぐらしだった。じょうぶだったおかあさんは、春のまっさかり——、ふきちゃんが三年になったばかりのとき、かぜをこじらせて、とつぜんはいえんになり、三日のあいだ、とこについたきりで死ん

でしまった。

芽をふいたばかりの庭のもみじの葉を、もぎとっていった、きつい風の日だった。

おとうさんとの二人ぐらしはすぐなれた。

おとうさんどくとくのおを入れてたくごはんも、こげめをつくったたまごやきもおいしかった。

なかでも、おでんのあじは、天下いっぴんだった。たべることはよかったがいそがしかった。買い物、せんたく、へやのそうじ、こう書けばなんでもないことだけど、おかあさんみたいに、はんだいをぴかぴかに光らせることや、おなべを使いやすいように、じゆんにならべておくことは、かんたんなことのようで大へんなことだった。

二人はてんでこまい。さびしがっているひまなんてなかった。といってしま



えばうそつきになる。死ぬまぎわ、お母さんが高い熱にうなされながら、手のひらをまるめて、――海がこぼれる。こぼれる。と手のひらをとじ、そして、しばらくすると、――忘れもの、海に忘れもの。とつぶやいたことが、いまでも、ふきちゃんのおくにおくに残つていた。

だから、夏休みには、

「島のおばあさんのところで、いっぷくしておいで。魚みたいにおよいでおいで。」

と、おとうさんがすすめたときには、おかあさんが島になにを忘れたのか、その忘れものを知りたいと、ふと思った。

行こう。行ってみよう。

けれど、およぐのはあまり、すすまなかった。

こわい。

プールでおよいでいるとき、水の中に顔をつけると、耳のおくがごぼごぼと音をたて、友だちの顔も、さっきまでかけていたベンチも、どこか遠くへ行つてしまうような気がする。

あわててうきあがり、先生のうでをにぎりしめる。

——たすけて！

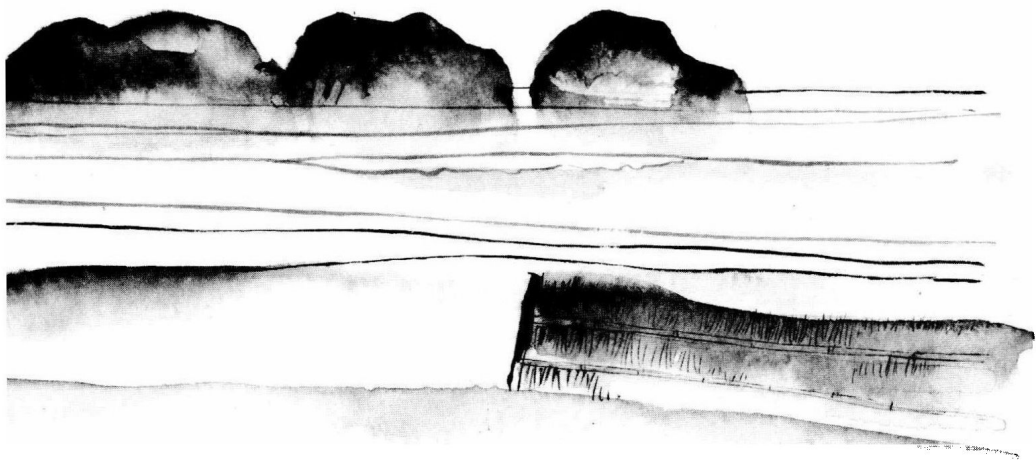
ふるえがきて、首のまわりがざらざらと、とりはだになった。

そばを、かよべいが人の気も知らないでオットセイみたいにおよいでいく。

オットセイになれなくても、アヒルくらいにはなりたいと、ふきちゃんはいつも思った。

花村先生が、いやな笑^{わら}い方をして、

「夏休みじゅうには、犬かきくらいでできるようにするのよ。」
と、言った。



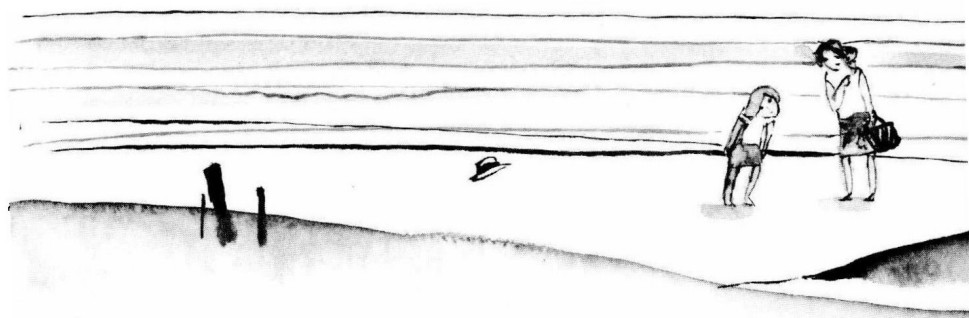
すなをふむ足音を聞いて、ふきち
ゃんはふりかえった。

すると、目の中に残^のっている青色
の中に女の人^のが立っていた。

——お母さん、

おもわずそうさけぶところだった。
顔だちはお母さんより大きかったけ
れど、しゃべりだすまえに、ぷくっ
とくちびるのはしが、ふくれてきそ
うなところは、そっくりだった。

おかあさんの島へ来たから、女の
人はみんなおかあさんに見えるのか



しら。

ふきちゃんは、まばたきしないで
その口びるを見つめていた。

「海が、ぼうしをさらっていくに。」
声を聞いて、はつきりとおかあさ
んでないことがわかった。いつのま
に落ちたのか、白い夏ぼうしが、す
なの上にあおむけになっていた。風
をはらんで、ふきちゃんのそばをは
なれようとしている。

おいかけた。

ぼうしは、おしりをずらすみたい